

学校経営のポイント

“苦難克服優勝”の高橋選手に学ぶこと

若井 彌一

11月20日の東京国際女子マラソンで、高橋尚子選手（ファイテン所属・33歳）が、2時間24分39秒のタイムで優勝した。2年前のこの大会は、アテネオリンピック代表選考レースであったが、高橋選手は終盤で失速し、2時間27分21秒で2位になりはしたものの、代表選考から外れる結果となった。

鮮烈だった35キロ後半からのスパート

高橋選手は、これまでの自己ベストタイムが2時間19分46秒（平成13年9月30日・ベルリン）であるから、それとの比較でいえば、約5分近くのタイム差がある。2時間20分台の壁を破って世界のトップに立ったときの走りは、日本人だけでなく、おそらく世界中のマラソン愛好者に強烈な印象を与えたに違いないが、記録的には平凡ともいえる今回の同選手の優勝は、別の意味で多くの人々にとって鮮烈な印象というより、「感動」と「勇気」を与えてくれるものであった。

記録的には平凡と評したが、それは身体的条件が順調であるとの前提を置いた場合である。今回は、その前提を欠いての大会出場であったこと（11月11日の練習で右足の太もも、ふくらはぎなど3カ所に軽い肉離れが生じた）は、大会前にマスコミ報道されていた。

35.7キロ地点で高橋選手は、満を持していたかのごとく、一気にスパートをかけた。素人ながら、筆者は、スパートが早すぎたのではないかと思いながらテレビ観戦していたが、全くの杞憂であった。スピードは衰えることなく、2位のバルシュナイテ（リトアニア・2時間25分15秒）、3位のアレム（エチオピア・2時間26分50秒。2年前の大会優勝者）

の追従を許さない、余裕を見せつけての優勝ゴールであった。

高橋選手の捲土重来に学びたい

新聞報道によれば、高橋選手は、医師により「筋膜炎症」と診断され、「痛みが増したらレース中にやめることを条件」にされての出場であった（11月21日付け『北陸中日新聞』「スポーツ版」による）。このような大きなリスクを負っての出場であったから、精神的不安も相当なものであったと思われる。その不安を克服できたのは、2年前の大会で苦杯を喫して以後、一度は走ることをやめることまで考えざるをえないほどに負傷（右足首骨折など）で苦しみながらも、それに屈せず目標を見失うことなく、可能な限りでの地道な練習を重ねてきたことの自信（自己信頼）があったからであろう。

どん底で苦しみながら、周囲の人々の協力への感謝の心を忘れることなく、目標を追い続けて努力を重ねた一人のマラソンランナーの軌跡は、学校で学んでいる児童・生徒にとっても、恰好の教材となる。今回の偉業をリベンジ（復讐）などと形容するのはふさわしくない。これは、まさしくグレート・カムバック（偉大なる振り返り）と称するに値する。

（わかい・やいち = 上越教育大学教授・附属小学校校長併任）

重要なお知らせ

FAX 通信、「メール配信」に全面移行！

●…FAX 通信は、平成18年1月配信分から、全面的にメール配信に移行いたします。

つきましては、配信の継続をご希望される場合は、教育開発研究所ホームページにて宛先のメールアドレスを登録くださるようお願い申し上げます。
<http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp>

●好評発売中！ ● 小川正人（中教審委員）【編】A5判220頁・定価2310円 教育開発研究所刊
中教審委員等第一線の研究者・実践者が解説！ 全国の先進的実践例を多数紹介！

義務教育改革—その争点と地域・学校の取り組み